

若手農家が野菜の魅力発信

大阪産(もん)で料理教室

オクラを、富田林市の安井裕太郎さん(36)がピーマンとズッキーニをそれぞれ提供した。

府内の若手農業者で構成される4日クラブ連絡協議会は、今年度より大阪ガスタッキングスクールと連携して、旬の農産物を使った料理教室を開いている。2回目となった7月13日は消費者12人が参加し、4日クラブから和泉市の辻井義隆さん(41)がパプリカとニンニクと

猛暑にも負けず 荒天にも負けず

富田林市 安井裕太郎さん



約85℃で、冬人参、ズッキーニ等多品種の野菜を栽培。野菜づくりは天候に左右されるなど

消費者との交流は やりがいい

和泉市 辻井 義隆さん



約1・5畝で季節野菜やミカンを栽培。農園の看板のパプリカは、消費地に近い強みを活か

歳のせい最近、昔のことをよく思い出す。「みごと卒業したならば」日本の農業の発展に「一生けん命尽くします」と何気に歌詞を口ずさんでしまう。



未来を託す 若き担い手にエールを…!

一般社団法人大阪府畜産会

専務理事 松崎 豊

歌った光景を昨日のよう思い出す。元より日本農業発展への寄与など露ほどもないが、卒業後、初心を貫き末端ではあるものの地域畜産を支える仕事に長く携

戸数となった今、当時の活気や賑やかさを思い出す。あれから40数年、随分と畜産技術は進歩した。家畜の生産能力向上と共にそれを支える栄養管理や省力化が急速に進んだ。

随 想

非農家であった自分が、一念発起して、満蒙開拓青年義勇軍の養成所として設立された関東の農業大学校を卒業したのはもう40数年前になる。3年の全寮制の学校であったが、ここでの文字通り同じ釜の飯を食った仲間との絆は、自分の貴重な財産になった。そんな気の知れた仲間と酒を飲んで冒頭の寮歌を

わってきたことだけは旧友に大きな顔ができると思っている。自分が本会に入った頃の畜産農家は、府下で10000戸を超え、酪農だけでも350戸もあつた。その1割にも満たない

例えば酪農で拘束性の高い搾乳作業や飼料給与のロボット化は既に実現し、更に作業全般に及ぶ省力化システムの模索が続いている。その背景には、人口減少で労働力不足が懸念される日

本の産業構造の中、経営を継承する担い手の確保問題がある。以前、欧州の畜産農家を巡る研修に参加したことがあつた。その際、印象に残った話題として後継者への経営移譲があつた。子供が幼い頃から別室で寝かせるなど自立を重んじる欧米と少々過保護な日本の子育ての違いもあるのだが、訪ねた畜産農家の多くが語った経営移譲は、余力が残る一定の年齢に達したら経営者はリタイアするのだという。サラリーマンの退職のイメージで、老後の生活に必要な資金で後継者に経営を譲渡し、居を移し経営には関わらない姿勢を強調していたことだ。日本ではこのような割り切つ

た経営移譲は少ないように思える。職人気質さながらに「背中を見て学べ」方式で、なかなか経営の主導権を任せてもらえず、軋轢を生む現場も少なからず見てきた。円滑な経営移譲を考える際、このような選択も頭の隅には是非置いておいてほしい。40年前の志は褪せないものの神輿を担ぐには心許ない年齢となった。でも、神輿の周りで大きなエールを送ることは幾つになつてもできる。

◇筆者の紹介(まつざき ゆたか)

昭和53年4月農民教育協会鯉淵学園卒業後、全農系食肉会社を経て昭和56年4月当会に畜産コンサルタント補として採用される。平成22年4月事務局長を経て平成25年6月から現職。